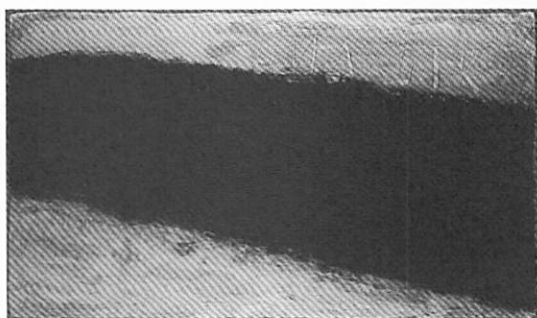




「イアホトカ」の謎

―香月泰男の《渚へナホトカ》に記されたロシア文字― 古田 浩俊

序

香月泰男の遺作《渚へナホトカ》には「NAXOTKA」のロシア文字が記されている(図1、2)。ロシア文字が読めない人でも、「NAXOTKA」の綴りから、題名にある「ナホトカ」と書かれていると想像がつく。しかし、実際には「イアホトカ」としか読めない。「ナホトカ」は、正確には「NAXOTKA」と綴るので、香月はここで、二つの文字すなわち「N」と「T」を間違えて記しているのである。

なぜ香月はこのような誤りを犯したのか、そこにはどのような心理的作用が働いていたのかを推察するのが、本論の目的である。

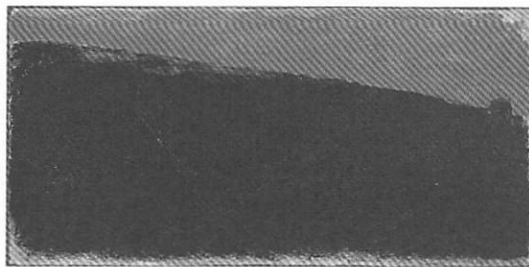
I 《渚へナホトカ》

本題に入る前に、問題の作品《渚へナホトカ》に関する事実を確認しておくことにする。この作品は、香月が一九七四年三月に亡くなったときにイーゼルに架かっていた作品であり、香月のライフワークであったヘシベリア・シリーズ^①全五十七点の最後の一枚でもある。ある死亡記事によれば、《渚へナホトカ》は、前年の十二月には、同じくヘシベリア・シリーズ^②の《日の出》とともに制作途中であり、記事と一緒に掲載された写真から、この時点では人の顔が完成作よりもくっきりと描かれていたことがわかる。この作品が初めて展覧されたのは、香月の没した二ヵ月後の五月に日本橋の高島屋で開催された「へ遺作による」香月泰男展^③で、《月の出》《日の出》を含めた未発表の作品十二点のうちの一点として出品された。同展の図録には次の説明文が記されている。「一九四七年五月初旬、私達はナホトカの渚に下車、漸くたどり着いたと云えよう。ああ、この塩辛い水のつながる向こう岸に日本があるのかと舌でたしかめたものだ。私達は一晚砂浜で寝た、その時の情景を描いた積りだが、何だか日本の土を踏むことなくシベリヤの土になった人達の顔、顔を描いているような気がしてならぬ。20数年経った今の、単なる私の感傷であろうか。」^④

横長の画面は上中下に大きく三分割されており、上下の灰色の部分に挟まれて、画面の左上から右下へ黒い帯が伸びている。そしてこの黒い帯の中から、「日本の土を踏むことなくシベリヤの土になった人達の顔」が明滅している。

問題の「NAXOTKA」の文字は、上の灰色の部分の右半分に、黒い帯の上辺に沿って、少し右下がり大きく記されている。技法的には、乾燥した灰色の絵具層の上に、方解末と木炭粉を使ったと思われる肌理が粗く色の濃





い層を作り、それが乾燥しないうちに鏡へろのようなもので上の層を掻き削って、下の層を出すことで文字を浮かび上がらせている。

《シベリア・シリーズ》の中で、この絵の他にナホトカでの出来事を描いたものに、乗船までの十数日間を旧海軍用のテントで、頭と足を入れ違いに横向きで寝た様子を描いた《ナホトカ》（一九六二）、緊張の中で受ける最後の点呼を描いた《点呼》（右・左）（一九七二）、船待収容所の側溝の中で絵具箱を枕に寝る姿を描いた《絵具箱》（一九七二）、あざやかな群青の日本海を望むナホトカの丘に、帰国を目前にして倒れて埋葬された日本人を描いた《日本海》（一九七二）、スクラムを組んでラーゲリの中を早晩からねり歩く情景を描いた《デモ》（一九七三）がある。

II 「ㇿ」 ㇿ「ㇿ」 「ㇿ」 ㇿ「ㇿ」

先に述べたように、香月は「HAXOTKA」とすべきところを「HAXOTKA」と綴っている。「ㇿ」と「ㇿ」の二つの文字の誤りのうち、後者の本来「ㇿ」と綴るべきところを「ㇿ」と綴っているのは、ごく単純な誤りと考えて間違いないまい。ロシア語には音声学的に子音同化という現象があり、「後ろにくる子音字が無声子音として発音される場合、その前にある有声子音字は対応の無声子音として発音される」というものである。「HAXOTKA」の場合、後ろにくる子音字「ㇿ」が「ㇿ」という無声子音として発音されるので、その前の有声子音「ㇿ」[d]は、対応の無声子音「ㇿ」として発音される。つまり「HAXOTKA」を文字通りに発音すれば「ナホドカ」になるのだが、子音同化によって実際は「ナホトカ」の発音になる。この実際の発音を再びロシア文字に置き換えてみると、「HAXOTKA」になるので、香月が本来「ㇿ」と綴るべきところを、誤って「ㇿ」と綴ってしまった理由は簡単に説明がつく。

それでは、「ㇿ」の場合はどうだろうか。もしもこれが「ㇿ」ではなくて「ㇿ」だったならば、「ㇿ」との形態上の類似から、本来横に一本線を引くところを斜めに引いてしまったという単純な誤りとして説明できるかも知れない。しかし、香月はここで「ㇿ」の代わりに「ㇿ」(イ)ではなく、「ㇿ」(イ・クラートコエII短いイ)の文字を記しているのである。それゆえに、上述した「ㇿ」の場合のような単純な誤りとしては看過することのできない、何らかの心理的作用がこの文字を記すときに働いていたのだと推測される。そこで、以下にこの「ㇿ」の文字を巡る問題を考察していくことにする。

III 《シベリア・シリーズ》に記された文字・記号

《渚へナホトカ》を含む《シベリア・シリーズ》の特徴のひとつに、画面に文字や記号が記されていることがあげられる。安井氏が指摘するように、それらは「いずれも体験のふかさ、あるいは切実さを絵とともに象徴的な記号で伝えようとする意図から出たもの」と解釈される。

《表》は《シベリア・シリーズ》のうち、画面に文字や記号が記された作品を年代順に一覧にしたものである。



「カタログ番号」は『没後20年 香月泰男展』（一九九四年、愛知県美術館ほか）に準拠している。「重要度」とは文字や記号がその絵の中に占める重要度を意味し、画面構成上必要不可欠な要素となっているものには◎を、それほどではないものには○をつけた。

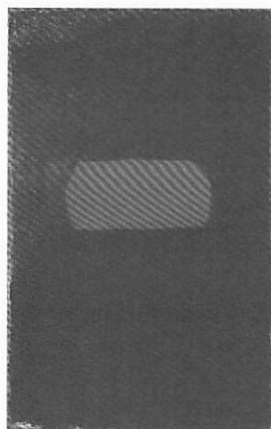
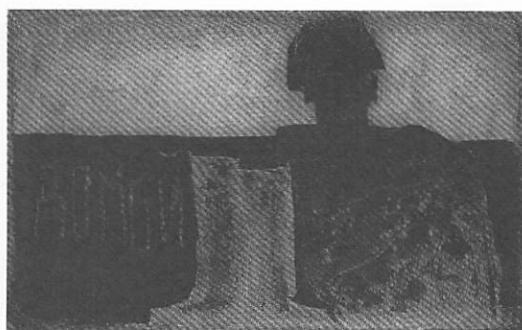
〈シベリア・シリーズ〉に記された文字については、ローマ字が使われる場合もあれば、ロシア文字が使われる場合もある。また、『私の地球』のようにローマ字による単語とロシア文字による単語が併用されていることもあるし、『運ぶ人』に記された「BLAGOVESHCHENSK」（ブラゴウエシチェンスク）「БЛАГОВЕЩЕНСК」 「BLAGOVESHCHENSK」の（つもう）の中の二つ目の「H」のように、ローマ字とロシア文字で同じ形をしながらも発音が違うために（「H」はロシア語で「h」の音になる）、ひとつの語の中で混乱して使われている場合もある。

ロシア文字に関して特徴的なのは、ロシア語から日本語に移された音を再びロシア文字に置き換えている例が見られることである。『復員ヘタラップ』に記された「СИБЕРИЯ」の赤い文字は、ロシア語の「СИБИРЬ」（シベリ）を語源とする英語の「SIBERIA」から造られた日本語の「シベリヤ」を一語ずつロシア文字に置き換えたものに他ならない。つまり、「シ」=「СМ」、「リ」=「БЕ」、「ヤ」=「Я」、「ア」=「А」になる。さらに、ロシア文字が記される場合、ローマ字に比べてそれが絵の重要な要素になっていることが多い。

IV 「N」を巡って

本来「НАХОТКА」とするところを、香月は何故「НАХОТКА」と記したのかという問題を解くに当たって、まず考察しておきたいのは、最初の文字になるはずの「H」がローマの「N」「E」に相当するという点を香月が知っていたか否かである。結論から先に言えば、香月はロシア文字の「H」とローマ字の「N」の関係を知らなかったはずである。時代は少し遡るが、先に述べた『運ぶ人』に記された「BLAGOVESHCHENSK」の中の二つ目の「H」は、その関係を知っているが故の誤りである。また、『渚（ナホトカ）』の二年前に描かれた『日本海』（図3）では、「日本海」を意味するロシア語「ЯПОНОСКОЕ МОРЕ」が一字の誤りもなく正確に記されており（図4）、この中でも「H」の文字が使われている。以上の二つの例の存在により、香月は「E」の音をロシア文字にすると「H」になるということを知りつつも、文字を記すときに誤って「N」と記してしまったのだと推察できる。

先に述べたように、「H」と書くつもりで「N」と書いてしまったのなら、単純な誤りとして説明がつく。しかし「N」ではなく、「N」と記している点を考察するに際し、まず香月のなかでこれら二つの文字がどのような関係をもっていたのかを明らかにしておきたい。果たして香月は、この二つの文字の違いを理解していたのだろうか。例えば、『点呼』（右）（図5）には「СКОРО ТОКНО ДОВОИ」の語が繰り返し書かれているが、この中で「N」と「N」の文字はまったく別の文字として書かれている。しかも『点呼』（左）（図6）では自分の姓である「かづき」の「き」を「KN」ではなく「KN」と正確に記しているのだから、香月は「N」と「N」の文字の違いをはっきりと認識していたはずだと推論できる。



それでは、香月が誤って「N」と記してしまった理由は何か。香月が「ヘシベリア・シリーズ」の中で「N」の文字を使っているのは、『バイカル』の右下に細い引つ掻き線で微かに「БАЙКАЛ」と記された一例を除くと、すべて「ДОВОЙ」(タモイ)という単語の中で使われている。「ДОВОЙ」は「ヘシベリア・シリーズ」の中で最も多く記された単語であり、とくに『タモイ』(図7)や『点呼』(右)では、絵に不可欠の構成要素として用いられている。「ヘシベリア・シリーズ」の中で「N」の用いられ方を検証する限りでは、香月にとって「N」は「ДОВОЙ」と密接に結びついた文字だということがわかる。だとすると『渚ヘナホトカ』にこの「N」という文字を無意識的に刻み込む香月の行為には、この画家の心を占めていたであろう「ДОВОЙ」の思いが相当強く作用していたのだと考えられる。

「ДОВОЙ」という五つの文字の中で、何故「N」の文字が無意識的に選択されたのだろうか。ロシア語の「НАХОДИТКА」の中に「ДОВОЙ」の要素を反映させるならば、すでに「Д」の文字が共通しているのだから、何も手を加える必要がないように思えるが、先に述べたように、文字は同じでも「タモイ」では「Д」の音になり、「ナホトカ」では「Н」の音になるので具合が悪い。もうひとつの子音字「М」は、形態的に見て「Д」に転用できそうだが、「М」はローマ字と形も発音も同じなので、ロシア文字が読めなくても「マ□トカ」と読めてしまうのでこれも都合が悪い。母音字の「О」は使われているので、残るのは「N」だけとなる。「N」は形態的に「Д」に似ているので、「НАХОДИТКА」の代わりに「НАХОД(Т)КА」と書いたとしても、違和感は少ない。香月の心の中でこうした取捨選択が行われたのだろう。

△「ДОВОЙ」

「ДОВОЙ」(タモイ)は、ロシア語で「家へ」「自宅へ」「故国へ」「故郷へ」という方向性を伴う副詞である。香月がロシア語として不正確な文字であることを知りながら、誤って「N」の文字を記してしまったのは、彼の心を占めていた「タモイ」の思いが作用していたからだと推論した。それでは、なぜ文字を記すときに香月の心を「タモイ」の思いが占めていたのか。香月は、亡くなる前日の三月七日、自宅を訪問したある人に個展出品予定の作品を描え、黒の中に数十人の兵隊の顔が描かれた「渚」について「これはナホトカの海辺に立った兵隊の心境を描いたもので、ああこの青い海の向こうに家族が待っている日本がある。これでいよいよ帰れるという喜びの半面、いや本当に帰れるのだろうか——という不安、これがこの顔だよ」と制作の意図を語り、次に「太陽」と「月」を並べて「阿倍仲麻呂の天の原ふりさきみれば……という望郷の歌があるね。いつ帰れるかわからない外国での生活をしたものでないと、あの歌の心境はわからないよ。この絵は僕の望郷の詩です」と説明したという。「太陽」(《日の出》図8)と「月」(《月の出》図9)が、望郷(「タモイ」)の詩ならば、同時に描かれた『渚ヘナホトカ』にも、少なからず「タモイ」の思いが込められていると考えるのが自然である。画面に描かれた顔は、「タモイ」を巡って「喜び」と「不安」で揺れている「ナホトカの海辺に立った兵隊」の顔であると同時に、「タモイ」の思いを胸に「日本の土を踏むことなくシベリアの土になった人達」の顔だとも解釈できる。香月の心



には、「ダモイ」の夢むなく祖国に帰れなかった彼らの願いをせめて絵の中で何とか叶えてやりたいという鎮魂の思いがあったのだろう。この思いの強さこそ香月をして「HAKODKA」の「H」を「DOMOI」を象徴する「M」に代えさせた要因であると推察される。そしてこの文字を日本海の彼岸に記す行為は、結果的に彼らの「ダモイ」の願いを叶えてやる行為とも解釈できるのである。

結び

本論はこれまで等閑視されてきた文字の誤りというひとつの事実を指摘し、この事実を巡って、なぜ香月がそのような誤りを犯したのかという疑問にたいして、心理的な側面からアプローチを試みたものである。本論で展開した推論が、事実とはまったくかけ離れているという可能性も十分ありうる。ここに提示したのは、あくまでもひとつの解釈の可能性にすぎず、真実に迫るためにはより多角的な視点からの考察が必要であることは言うまでもない。

香月泰男に関して、そしてこの画家の代名詞でもある「ヘナホトカ」に関して、先学によりさまざまな視点からの研究が進められてきている。^(註) 本論が、こうした研究に新たな視点を提供できることを願うばかりである。

註

- (1) 「アトリエの画架にはシベリアシリーズの五十作目『ナホトカ』がかかっていた」(山口)『読売新聞』昭和四十九年三月八日。また、坂倉秀典氏も「没後20年 香月泰男展」に際して、一九九五年十一月に愛知県美術館に来館した際、『渚ヘナホトカ』の前で、香月が亡くなったときにはこの絵が画架に架かっていたと証言している。
- (2) 「昨年の暮れ、山口県の三隅町香月さんのアトリエを訪ねたとき、香月さんは、制作途中の三点を示して『これが、いまやっているシベリア・シリーズだ』といった。一点はナホトカで帰国を待つ日本人捕虜の群れ、一点は『太陽』、もう一点は『月』だった。」源弘道『朝日新聞』文化欄、昭和四十九年三月九日。写真…「アトリエでの香月泰男氏」(昨年十二月、山口県三隅町の自宅で)。写真には『渚ヘナホトカ』の一部が写っている。
- (3) 図録には邦題の他に「NAHOTKA BEACH」の英語タイトルも併記されている。『遺作による』香月泰男展』図録、一九七四年、高島屋美術部、フォルム画廊、No.1。
- (4) 『ナホトカ』のための素描のひとつ(一九六〇年頃)には、香月自ら鉛筆で「Nakhodka」の綴りを記している。

るので、『香月泰男 シベリヤ・シリーズへの原点展画集 私のシベリヤ』三隅町立香月美術館、一九九四年、No.128《ナホトカ1》参照)、香月は「ナホトカ」の「ト」には「Д=Л」の文字を使うことを、かつては知っていたはずである。

- (5) 安井雄一郎「香月泰男のシベリヤ・シリーズについて」『香月泰男』展図録、下関市立美術館、一九八七年、四七―四八頁。

- (6) 「シベリヤ」のロシア文字については、『薪をつくる人』(一九六八年頃)の鋸に「СІВЕРІЯ」と打ち出されており(三隅町立香月美術館、前掲図録、No.80参照)、その他にも『業火』(一九七〇年)のエスキース的作品(『マイナス35度の黙示録 香月泰男ヘシベリヤ・シリーズ』展図録、山口県立美術館ほか、一九八九年、No.70参照)や、『シベリア画集発刊ポスター原画』(一九七一年)にも同じ綴りが使われている(三隅町立香月美術館、前掲図録、No.1参照)。また、『私の地球』に記された「СІВЕРІЯ」の文字も、現在でははっきりと識別はできないが、もとは「СІВЕРІЯ」と綴られていたと推測される。一方、一九六七年の『復員ヘタラップ』に使われているのと同じ「СІВЕРІЯ」の綴りは、同年に刊行された『画集シベリヤ』の表紙や『シベリヤのタイトル文字』(一九七一年頃)にも使われている(三隅町立香月美術館、前掲図録、No.16)。

香月が同時期に「シベリヤ」を二通りに綴っていることに關しては、「СІВЕРІЯ」は日本語の「シベリヤ」をロシア文字に置き換えたものに他ならず、「СІВЕРІЯ」は本来のロシア語「СІВЕРЬ」と形態が似ているので、香月はロシア語で「シベリヤ」と書いたつもりが、誤って記憶していたためにこの綴りになったと想像される。「СІВЕРІЯ」の「И」は、おそらく「Л」のつもりであろう。ロシア文字の「Л」はギリシャ文字の「Λ」(ラムダ)のようにも書くので、この仮定が正しければ、「シベリヤ」の発音になり、本来の発音「シベリヤ」に近くなる。「Р (R)」と「Л (L)」の混同は、他にも見られ、『バイカル』に記された「БАЙКАЛ」は正確には「БАЙКАЛ」と綴る。

- (7) 『日本海』のエスキースのなかにも、「ЯПОНОСКОЕ МОРЕ」のロシア文字が記されているものがある(三隅町立香月美術館、前掲図録、No.137《日本海2》)。これらのエスキースでは「日本海」と漢字が記されたものもあり、当初は漢字を使う可能性もあったことを示唆している。しかし、最終的にはロシア文字を使用しているのので、『日本海』でロシア文字を使用することを決意した時点で、ほぼ同じ構図で描かれることになる『渚ヘナホトカ』にロシア文字を入れることが予想的に決定されたと推察される。

- (8) 『復員ヘタラップ』の中の「СКОРО ТОКІО ДОМОЙ」の文字は、「MAIZURU」や「ヤマト」、一九六七年の『画集シベリヤ』(求龍堂)の図版には写っておらず、一九七一年の『シベリヤ画集』(新潮社)には写っているのので、これらの文字は後に削り出されたものであろう。

- (9) 「H」を「Н」に代える行為は、さらに興味深い現象を生む。つまり「ЯХОТКА」の最初の二文字「ЯА」(イア)は、「Я」(ヤ)とほとんど同じ発音になるのである。『日本海』に書かれた「ЯПОНОСКОЕ МОРЕ」(ヤポンスコエ・モリーエ=日本海)の文字から連想されるように、「ЯА (B)」は「ЯПОНИЯ」(ヤポニーヤ=日本)

を暗示しているとも推察できる。文字が画面の上方、つまり構図的に日本に近い方に記されているのも暗示的である。

(11) (10) 編集部(X)「香月先生の絶筆」『一枚の繪』一九七四年五月、第三一号、九頁。

一九九四年の『没後20年 香月泰男展』以前の文献に関しては、同展図録を参照されたい。これ以降の展覧会としては、一九九五年に山梨県立美術館で開催された『香月泰男 ヘシベリア・シリーズ展』があり、同展図録には安井雄一郎、飯野正仁両氏の論文や倉迫啓司氏のルポルタージュが掲載されている。その他の論文としては、安井雄一郎「従軍期の香月泰男の制作」(『デアルテ』一九九五年三月、十一号、四九―七五頁)などがある。

(表)

カタログ番号	作 品 名	制作年	文字・記号	重要度
74	ホロンバイル	1960	HULUN BUIR	
80	アムール	1962	AMUR	○
86	餓	1964	2646 48	
88	囚	1965	𐰢	◎
95	復員〈タラップ〉	1967	MAIZURU	
			СКОРО ТОКИО ДОМОЙ	
			СИБЕЛИЯ	◎
			1947	◎
99	私の地球	1968	IMPAL	
			GUADALCANAL	
			СИБЕИЬ	
			SAN FRANCISCO	
			HULUM BUIR	
101	護	1969	2646𐰢	
104	朕	1970	11.2.1945	○
			朕	○
			(その他の漢字)	
107	点呼 (左)	1971	17.5.47 ЯСУО КАЗУКИ	◎
108	点呼 (右)	1971	СКОРО ТОКИО ДОМОЙ	◎
			𐰢СКОРО ТОКИО ДОМОЙ𐰢	○
109	-35°	1971	-35°	○
110	バイカル	1971	БАЙКАР	
111	日本海	1972	ЯПОНСКОЕ МОРЕ	○
114	絵の具箱	1972	葬月憩藥飛風道鋸朝陽伐雨	◎
115	海拉爾	1973	Hai-Lar	
117	渚〈ナホトカ〉	1974	ЙАХОТКА	◎